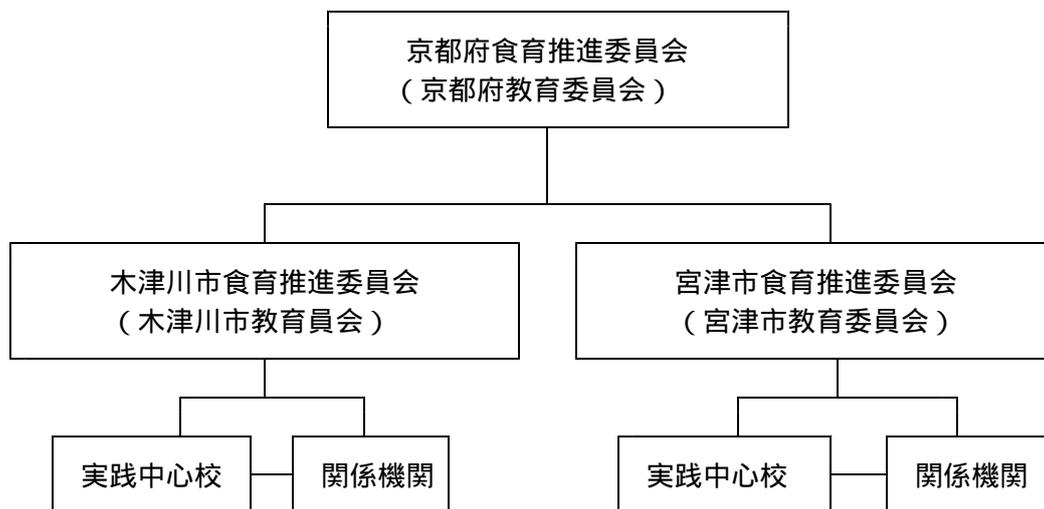


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	京都府
再委託先名	木津川市・宮津市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ	教育活動全体を通じて食育を推進するための方策
	<p>府内の各学校での食育を推進するための方策の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成22年度に京都府食育推進委員会で作成した支援資料（食育参考資料集）の有効な活用方法等を含め、各学校での計画的な食育の推進について検討を行う。 <p>食育研修会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・府内全域の食育を推進する。 ・研究成果を府内全域へ波及する。 <p>研究報告冊子の発行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推進地域における研究成果等を全校に紹介する。

具体的計画
<p>京都府食育推進委員会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学識経験者、実践中心校（校長、栄養教諭）、京都府給食研究会会長、京都府学校給食会事務局長、各教育局担当指導主事、京都府教育委員会で構成する京都府食育推進委員会を設置した。 <p>第1回京都府食育推進委員会 平成23年9月9日（金）</p> <p>第2回京都府食育推進委員会 平成24年2月20日（月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推進地域（木津川市、宮津市）の取組の報告と取組に対する指導助言 ・平成22年度に作成した支援資料（食育参考資料集）の効果的な活用方法等を含め各学校における計画的な食育や家庭や地域と連携した効果的な指導の在り方等について検

討を行った。

- ・教育局別中学校研修会を実施し、食育参考資料集の効果的な活用方法や食育の取組事例を普及することにより、中学校における食に関する指導についての理解を深め食に関する指導計画に基づいた学校教育活動全体を通じた食育の推進を図った。

乙訓教育局中学校食育研修会	平成24年1月12日(木)
山城教育局中学校食育研修会	平成24年2月10日(金)
南丹教育局中学校食育研修会	平成24年1月12日(木)
中丹教育局中学校食育研修会	平成24年1月31日(火)

京都府食育推進研修会の開催

平成23年2月20日(月)

- ・甲子園大学栄養学部准教授博士(医学)管理栄養士木村祐子氏による講演をとおして、スポーツ選手に対する栄養管理の方法や成長期における発育・発達と食の重要性について学んだ。
- ・推進地域での実践発表をとおして、事業の成果を府内に普及するとともに各学校における家庭・地域と連携した食育の推進を図った。

報告書の作成・配布

- ・推進地域の実践研究の成果についての報告書を作成し、府内の学校等に配布することにより、家庭・地域と連携した学校教育活動全体を通じた食育の推進を図る。

木津川市・宮津市食育推進委員会への参画等

両推進地域に設置する食育推進委員会の委員として府教委保健体育課の指導主事が参画し、指導的役割を果たすとともに、日常的に該当する教育局(山城・丹後)が指導助言及び連絡調整を密に行い、円滑な事業の推進を図った。

数字で変化のあった事項について

支援資料(食育参考資料集)の活用について

校内研修で活用した。	10校
指導計画の見直しを行った。	106校
食育参考資料集の事例を参考に、食育の取組を行った。	46校

(食育参考資料集「学校における食育の推進」についてのアンケートから)

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・両推進地域においては児童生徒の実態を踏まえ、栄養教諭を中心としながら全教職員・家庭・地域との連携を図った多彩な取組を実施することにより、児童生徒や保護者の食への興味・関心を高めるとともに郷土への理解を深めたり、地場産物の供給体制を整備し学校給食への地場産物の使用割合をあげるなどの、効果をあげることができた。

こうした推進地域での取組を実践発表や報告書等により広く普及することにより各学校での食育推進の支援を行うことができた。

- ・今年度は特に中学校での食育の推進の支援に力を入れ、教育局別中学校食育研修会の実施を行った。研修会では、中学校で実施されている食育の実践報告、支援資料(食育参考資料集)の事例の紹介、課題の交流など中学校に的を絞った研修ができ、今後の各中学校での食育の推進の支援をすることができた。
- ・平成22年度に京都府食育推進委員会で作成した支援資料(食育参考資料集)を活用し各研修会で食

育についての説明を行ったりや活用ガイドを作成することにより、各学校における計画的な食育の推進のための支援を行うことができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校のすべての学校で、全教職員の共通理解のもと計画的な食育が推進できるよう、引き続き支援が必要である。

より一層食育を推進するためには、どのようなことが必要だと思うか。

< 京都府全体での取組 >

	1位	2位	3位
小学校	情報の配信 66.0%	研修会の開催 35.7%	人材リストの作成 35.2%
中学校	情報の配信 65.7%	研修会の開催 43.4%	人材リストの作成 36.4%
高等学校	情報の配信 75.9%	人材リストの作成 25.9%	研修会の開催 24.1%
特別支援	情報の配信 66.7%	研修会の開催 53.3%	人材リストの作成 46.7%

< 学校での取組 >

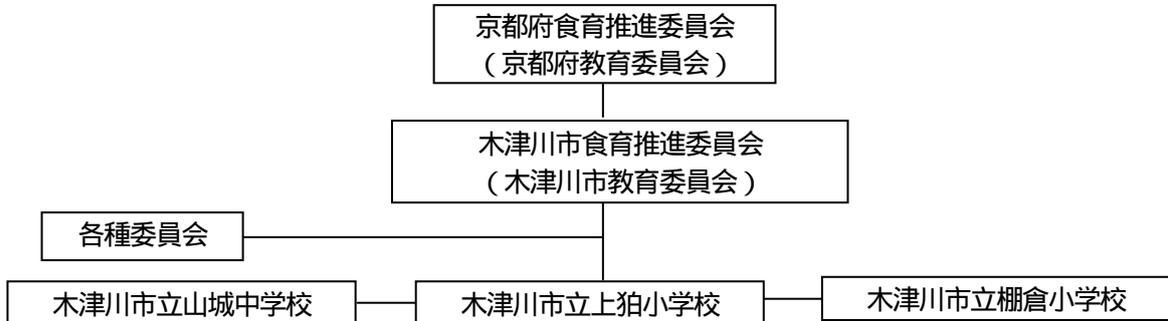
	1位	2位	3位
小学校	家庭との連携 54.2%	給食の時間における取組の充実 50.0%	関連教科等の取組の充実 43.7%
中学校	家庭との連携 55.6%	食育の推進体制の整備 45.5%	関連教科等の取組の充実 39.4%
高等学校	関連教科等の取組の充実 58.6%	個別的な相談指導の実施 36.2%	家庭との連携 29.3%
特別支援	関連教科等の取組の充実 60.0%	家庭との連携 47.0%	食育の推進体制の整備 40.0%

(食育参考資料集「学校における食育の推進」についてのアンケートから) アンケート結果をふまえ、より一層食育が推進されるよう支援していく。

再委託先名

木津川市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 小・中学校における発達段階に応じた系統的、計画的な食育推進の方策

1 発達段階に応じた指導の充実

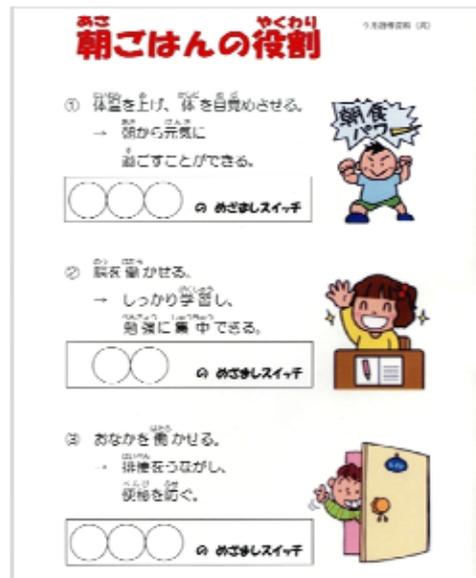
- ・ 9年間を見通した発達段階に応じた食の全体計画・年間指導計画を見直して実践した。
- ・ 小学校に来年度入学する児童の保護者を対象とし、食に関する啓発や給食試食会を実施した。
- ・ 望ましい食習慣形成のため、継続的な朝食指導『モーニング5分間スタディ』を行った。

『モーニング5分間スタディ』

毎月19日の食育の日、朝の5分間、テーマにそって学習する。児童・生徒用と保護者用の2枚の資料を準備し穴埋めやクイズをしながら進めた。

定期的に食について学習することで、自分の生活を振り返り、朝食について考える機会を作るとともに、発達段階に応じた系統的な指導方法を探ることを目的としている。

	テーマ
9月	朝ごはんの役割
10月	朝ごはん和生活リズム
11月	朝ごはんの内容
12月	朝ごはん和脳(学習)
1月	朝ごはんの選び方



ねらい

- (1) 児童・生徒が朝食の重要性を知り、望ましい朝食のとり方を理解する。
- (2) 月に1回、定期的に食に関する指導を行うことで、自分の生活を振り返り、朝食について考える機会を作る。
- (3) 発達段階に応じた系統的な指導方法を探る。

学年	小学1～2年生	小学3～5年生	小学6年～中学3年生
目標	1日の生活における生活リズム(朝ごはん)の大切さを理解する。 朝ごはんをきちんと食べようとする意欲をもつことができる。	朝食の重要性と望ましい朝食のとり方を理解し、自分の生活を振り返ることができる。	朝食の重要性と望ましい朝食のとり方を理解し、自分の食生活における問題点や改善点を考えることができる。

2 食育推進のための研修

(1) 食育研修会(8月)

木津川市の保育園・幼稚園・小学校・中学校の職員を対象として、食育研修会を実施した。本事業の実践報告や、保育園からの実践報告に加え、京都府立大学教授大谷貴美子先生による講演「学校教育における食育の必要性」を聴き、食の大切さを木津川市全体で学習することができた。



(2) 授業研究会(10、11月)

3校合同の授業研究会を実施し、相楽地方の教職員に公開した。最終日には分科会をもち、小・中学校9年間を見通した食育推進のための方策等、3つのテーマにそった研究協議を持ち、各校の食育の取組の交流を行った。



- | | | | | |
|-----------|-------|-----|--------|---------------------|
| 10月26日(水) | 山城中学校 | 1年生 | 学級活動 | 「成長期に必要な栄養素と朝食の大切さ」 |
| 11月2日(水) | 棚倉小学校 | 1年生 | 生活科 | 「ぐんぐんのびろ」 |
| | | 3年生 | 学級活動 | 「地域の食材を知ろう～えびいも～」 |
| 11月15日(火) | 上狛小学校 | 4年生 | 体育(保健) | 「育ちゆくわたし」 |
| | | 5年生 | 家庭科 | 「元気な毎日と食べ物」 |

1 地場産物を使用した学校給食を教材として活用した取組の充実

(1) 山城給食の実施

毎月3～4回、木津川市山城町の旬の食材を使用した「山城給食」の日を設定し、実施した。献立だよりや毎日の給食放送、掲示資料等を用いて紹介することで、地元食材への興味・関心を高めるとともに、郷土愛をはぐくむことができた。地産地消の給食ポスター（右図）は毎月作成し、各クラスに掲示し、担任から地元食材について紹介する資料として活用した。



山城給食 4月
たけのこ「若竹汁」



(2) 収穫体験の実施（5月、6月）

収穫体験としてえんどう豆の収穫やさやむきを行った。むいた豆は翌日の給食に使用し、全校で食べた。給食センターを見学したり、自分でむいた豆が給食センターで調理される様子を写真で見たりする中で、給食の様子や給食に関わる人の様子を知り、感謝の気持ちを持つことができた。

<上粕小学校・棚倉小学校>
1年生 生活科
「えんどうまめのさやむき」

<上粕小学校>
1年生 生活科
「給食センターの見学」

<棚倉小学校>
3年生 総合的な学習の時間
「えんどうまめの収穫体験」



(3) 食生活改善推進員の方々との調理実習（7月、10月、11月、12月）

小・中学校（小学5・6年、中学2年）では、地域の食生活改善推進員の方々に調理指導を受け、地場産物等を使用した調理実習を実施した。地場産物のよさや健康的な食生活について考えるとともに、地域の方から調理技術を学び、伝統的な食文化をつなぐことを目的とした。



- <上粕小学校 5年生> 総合的な学習の時間：収穫した米を使った調理実習
- <上粕小学校 6年生> 家庭科：バランスの良い弁当作り
- <棚倉小学校 6年生> 家庭科：旬の食材を使用した調理実習
- <山城中学校 2年生> 家庭科：地元食材や加工品を中心とした調理実習

(4) 招待給食の実施

給食の食材を作っている地元の生産者を小学校に招き、一緒に給食を食べる招待給食を実施した。生産者が育てた食材を使った給食と一緒に食べ、作物を育てるときの苦労や工夫の話を直接聞くことで、食べ物や給食に関わる人達への感謝の気持ちをはぐくみ、地域に目を向けることができた。



- <7月 万願寺唐辛子(上粕小)> <1月 菊菜(上粕小)>

2 地場産物の供給体制の整備

木津川市における地場産物の供給体制の整備を行い、活用率の向上を図るための会議を実施している。

3 地場産物を活用した献立の作成(7月)

夏休み、給食センターにて、地場産物を活用した新メニューの調理実習を行った。9月以降の給食に実施し、たより等で紹介した。



1 たよりを活用した食の啓発活動 ～家庭と連携した取組～

(1) 食育だよりの配布(7月～)

食育の大切さを家庭へ啓発するとともに、小・中学校での取組を家庭に知らせる機会とするため、食育だよりを配布した。また、食に関するアンケート結果の報告も行った。

(2) レシピの紹介

朝食内容の改善や、朝食に対する家庭の意識を高め、朝食摂取率を上げるため、わが家の自慢の朝食レシピや簡単にできる朝食レシピを家庭から募集し、たより等で紹介した。



2 地域と連携した取組

(1) 地域の人材を活用した食育の取組

地域の方を講師に招き、栽培や収穫等の体験活動を行った。実体験を通して、食への興味を高めたり、地域の文化に触れたりすることができた。

<上粕小学校 2年生> 生活科 「ぐんぐんのびろ」(ほうれん草の種まき・パーティー)



地元でほうれん草や水菜、菊菜などの軟弱野菜を作っておられる農家の方に教えてもらいながら、ほうれん草の種まきをした。毎日、芽が出たり大きく成長する様子を観察し、収穫した後は、農家の方を招待して、ほうれん草を使ったパーティーを開いた。

<上粕小学校・棚倉小学校 3年生> 社会科 「畑ではたらく人々の仕事」



地元の小松菜やえびいも農家の方のご協力を得て、作物の畑を見学した。栽培や収穫の様子を見学・体験したり、出荷するまでの仕事の話や生産者の思いを、直接聞いたりすることができた。

<上粕小学校 5年生 > 総合的な学習の時間 「田植え・稲刈り」



地元の森林組合や米農家の方にお世話になり、地域の田んぼで田植えや稲刈り体験を行った。収穫した米は、調理実習等で使用し、味わった。また、家庭科の授業と関連させ、米の炊き方を学んだ。

<上粕小学校 6年生 > 総合的な学習の時間 「お茶博士になろう」



地元の農家やお茶の先生に教わり、茶摘みや製茶、お点前体験を行った。地域の特産物であるお茶について関心を持ち、詳しく調べようとする態度の育成をねらいとした。

<山城中学校 2年生 > 総合的な学習の時間 「お茶の学習」



山城茶業組合青年部の方々に教わりながら、地域の特産物であるお茶のおいしい入れ方等について学習した。お茶の入れ方による味の変化を体感し、楽しみながら学習した。

(2) 親子クッキングの実施(10月、12月)

秋と冬の2回、地場産物と朝食をテーマに親子クッキングを実施した。調理の前には、地元の食材の紹介をし、実際に見たり触れたりすることで、地場産物への理解を深めることができた。

また、親子で調理することで、食への興味・関心を高めることができた。

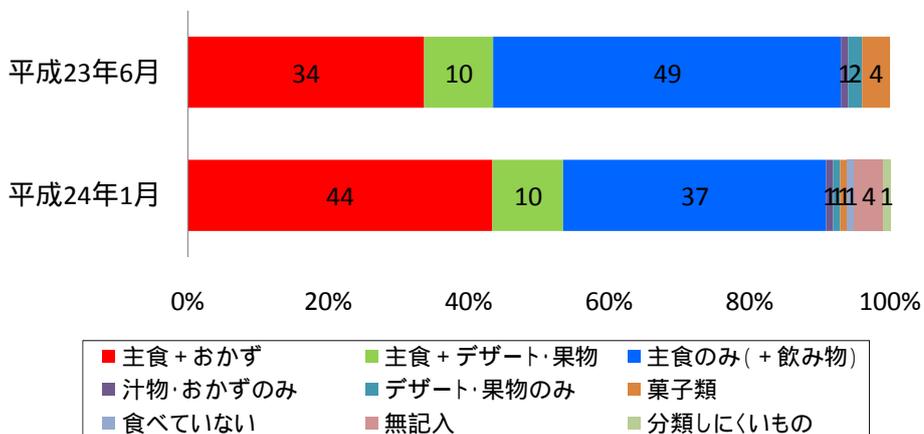


テーマ1～3に共通する具体的計画

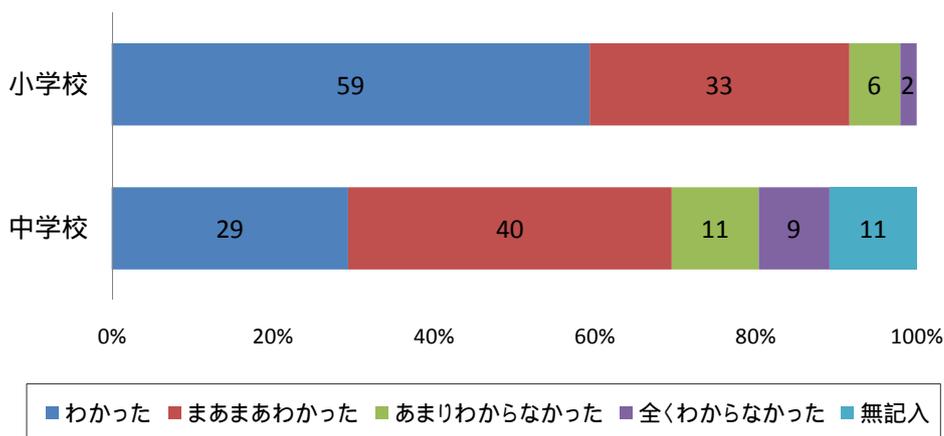
1 食に関するアンケートを実施(6月・1月)

(1) 児童・生徒

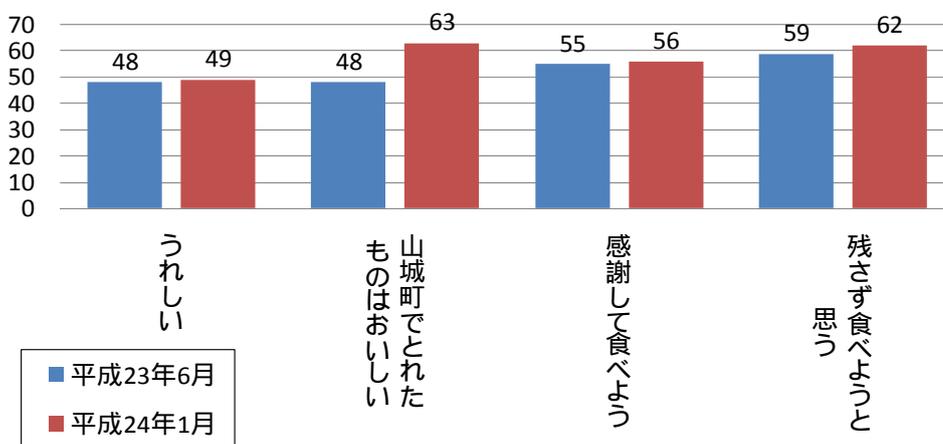
今日の朝ごはんは何でしたか(小学校)



モーニング5分間スタディを終えて、朝ごはんについてわかりましたか

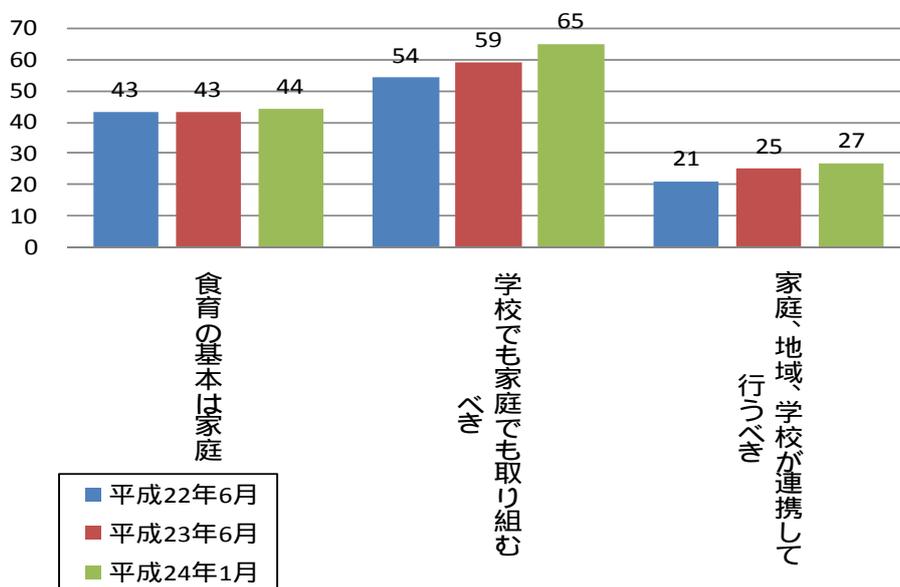


給食に地元でとれた食べ物が出たとき、あなたはどのように思いますか(小学校)

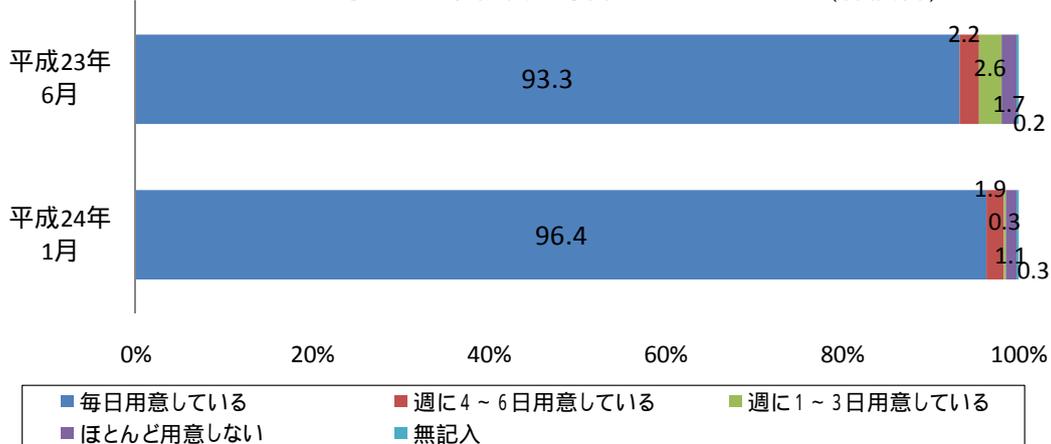


(2) 保護者

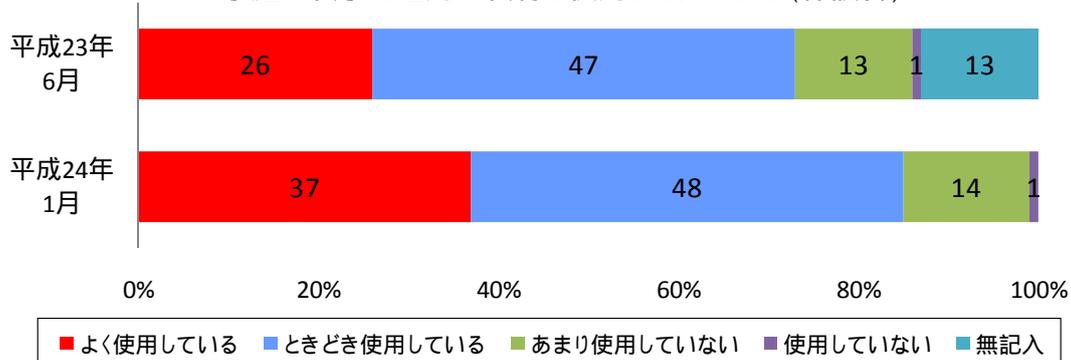
食育についてどのようにお考えですか(保護者)



あなたのご家庭では、朝食を毎日用意していますか(保護者)



家庭の食事に地元の食材を使用していますか(保護者)



- 2 木津川市食育研修会の実施（8月17日）
- 3 親子クッキングの実施（10月、12月）
地場産物を使用した地産地消の親子クッキングの実施
- 4 食育だよりの発行（月刊）
保護者への食育の啓発資料とした。
- 5 モーニング5分間スタディ（9.10.11.12.1月）の実施
- 6 授業研究会の実施（栄養教諭と連携したT.T授業を含む）
山城中学校（10月26日） 棚倉小学校（11月2日） 上粕小学校（11月15日）

数字で変化のあった事項について

- 1 今年度の6月に比べ、朝食に主食と何らかのおかずを食べている児童は34%から44%に増え、主食のみ（+飲み物）の児童は49%から37%に減った。
- 2 平成24年1月に実施したアンケートでは、朝ごはんの大切さなどについて「わかった」、「まあまあわかった」と答えた児童・生徒は小学校で約9割、中学校で約7割だった。
- 3 小学校では、今年度の6月に比べ、山城町でとれたものはおいしい、残さず食べようと思う児童が増えた。
- 4 保護者の食育に対する意識について、食育の基本は家庭であるとしながらも、平成22年6月に比べ、平成24年1月では、食育は「学校でも家庭でも取り組むべき」、「家庭、地域、学校が連携して行うべき」と考える保護者の割合が増えた。
- 5 朝食では、ほとんどの保護者が毎日用意しているが、今年度の6月に比べ、朝食を毎日用意する家庭が増えた。
- 6 家庭の食事では、今年度の6月に比べ、地元の食材をよく使う保護者が増えた。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 1 発達段階に応じた食に関する年間指導計画の見直しと食に関する指導の実践
小・中学校が連携し、9年間を見通した系統的な指導内容を考え、年間計画を見直すことができた。
栄養教諭と連携し効果的な指導ができた。
- 2 職員研修・授業研究会等の実施
木津川市食育研修会を実施し食育の取組を木津川市全体に広めることができた。
3校それぞれが授業研究会を行い、取組や実践を交流し、教職員の食に対する意識を高めることができた。
- 3 望ましい食習慣形成のための朝食指導の実施
モーニング5分間スタディ等を実施することで児童と保護者が朝食の大切さについて考え、見直すことができた。
- 4 地場産物を使用した親子クッキングの実施
実際に調理することで地場産物を見直すよい機会になり、料理を通じて食への関心を高めることができた。
- 5 招待給食の実施
生産者の話を直接聞き、育てられた食材を使用した給食を一緒に食べることで、感謝の心をはぐくむとともに地元産業への関心が高まり、残さず食べる意欲につながった。
- 6 「食育だより」の発行
学校の取組や食に関するアンケートの結果を家庭に知らせることにより、食の啓発を行うことができ保護者の食に対する意識を高めることができた。
- 7 地域の人材を活用した食育の取組
地域の生産者の方等を社会人講師として招き、地域の産業や文化に触れる体験的な活動を実施することで、食や地元産業への意識を高めることができた。

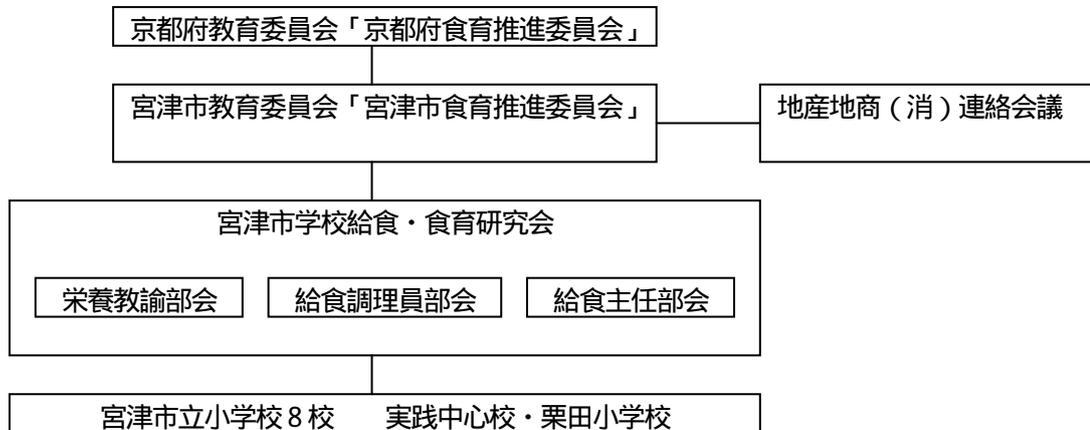
今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 1 小・中学校9年間を見通した発達段階に応じた系統的な指導内容の工夫。
- 2 発達段階や実態に応じた児童・生徒の興味・関心を高める指導内容の工夫。
- 3 地域と連携した継続的な取組のための工夫。
- 4 食育推進のための家庭との連携。

再委託先名

宮津市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実のための取組

「全体計画」及び「年間指導計画」に基づき効果的な指導を行い検証する

全体計画や各学年の年間指導計画に基づき、全校的な取組や各学年の授業研究、取組等を中心に据えながら学期ごとに検証を進めている。

(1) 教科学習での検証

ア 6年生の理科の実践

6月に理科「生物どうしのつながり」の単元で、食べるということを通して、生物どうしのつながりを調べる授業研究を行った。この授業の前に家庭科において、朝食調べや食生活のバランスを考えた授業を行った。授業では、自分たちが考えた朝食メニューの中の食材のもとをたどっていく活動を通して、ヒトや動物が養分をとる上で他の動物や植物と深くかかわり合っていることに気づき、自分たちが当たり前のように食べている食べ物に対して感謝の気持ちを育てることができた。

イ 5年生の社会科の実践

10月社会科「これからの食料生産とわたしたち」の単元で食料自給率が下がり、今後どうしていくべきかという課題について、実際に自給率分だけご飯やパンを食べるなどの体験を交えた授業研究を行った。授業では自分たちの住む地域に改めて目を向け、身近な生活、給食の取組や「地産地消」などの考え方から食料生産の問題を解決していくような意見がでた。自給率の捉えがやや難しい児童もいたが、6年の家庭科、社会科や中学校での学習につながる一つのきっかけになる授業を展開することができた。

ウ 3年生の社会科の実践

「農家の仕事」の単元において、ヤマノイモの栽培やその効能などについて学習をまとめていく中で、地元の産物の良さを学ぶことができた。農家の協力により、児童自身で、地域の名産であるヤマノイモを校内の畑で年間通して育てたり、農家の栽培の様子を見学したりして、栽培への意欲を持続させた。また、食生活改善推進委員の協力のもと、収穫したヤマノイモを用いた菓子作り



5年生 食糧自給率の授業



3年生の収穫の様子

を行い、収穫の喜びを感じさせることができた。まとめたことを発表していく学習では、お世話になった農家の方を招き、学習の成果を披露するとともに、新たに学習を深め、良いふりかえりの学習ができた。

(2) 学級活動での検証

2年学級活動では、昨年、食べ物の赤・黄・緑のグループ分けをし、日常の食生活に活かすように学習した。児童の興味・関心を高めるため、キャラクターを用いて、朝食における栄養のバランスが悪いと生活場面でどのような悪影響があるのか考えさせ、元気の出る食事について理解させた。学習後に、保護者の協力を得て、栄養素の色分けをしながら、親子で朝食メニューについて考え実践した。児童も保護者も日常の食生活を振り返り、栄養バランスのとれた食事について気付かせることができた。この実践をもとに学年の系統立てた指導の大切さを研究することができた。

学級担任と栄養教諭の効果的な指導の在り方について

(1) 単元に入る前の工夫

食育の学習では、栄養教諭と事前の打ち合わせを持ち、どこでT・T指導を行うか、どんな内容で児童の興味を持たせるかなど工夫をしている。

(2) 授業の中での工夫

授業では、主に「食に関する」内容を取り扱う時に、T・T指導で入るようにしている。特に、1時間の授業の中で担任がT₁、栄養教諭がT₂となり、食に関する話や実演の場面はT₂が中心となり指導する形態が効果的であることが分かった。

望ましい食習慣の形成や自己管理能力の育成に向けた指導内容の充実

食習慣の形成や自己管理能力の育成では、食に関する指導の事前・事後の実態調査を通して、学習後の児童の変容を重視している。

(1) 学年発表

「食について学んだことや取組を全校に発信する場」として児童朝会時に、各学年の学習の成果や感想を発表している。また、多くの児童が感想を発表し、互いに学び合う場になっている。

6年生の発表は、家庭科、理科で学んだ内容をもとにして、朝食の大切さをクイズ形式にして発表した。提示の仕方や間を笛の合奏などで行うことで、全児童にポイントを分かりやすく伝えていた。



6年朝会発表

(2) 交流給食

児童会の給食委員会を中心に年間3、4回交流給食を行っている。異年齢班別、誕生日別、地区別などグループ編成を考えたり、給食中にクイズを出したり、給食後の交流遊びも企画したりして、楽しく給食を食べる機会となっている。

(3) 食育クイズラリー

児童が主体的に楽しく学ぶ機会として、異年齢チーム対抗で食に関する問題を解いていくクイズラリーを行っている。チーム全員が、これまで学んだ食に関する学習内容や地元の食材に係わる問題を解く活動を通して、食への関心を高める機会となっている。



(4) めざせ！箸使い名人

正しい箸使いを意識させるため、箸の使い方を楽しく練習できるコーナーを設けている。初級から名人までの難易度があり、学年に応じた目標を設定し、休み時間に多くの児童が、目標を目指しチャレンジしている。

(5) 食に関する掲示コーナー

廊下や階段の踊り場に、給食に関する情報や各学年の取組、学習した内容等を掲示し、児童の食に関する興味・関心を一層高めるようにしている。

廊下に設置した「めざせ！箸使い名人」コーナー

地場産物を活用するためのネットワーク

宮津市では、宮津産食材を活用するために「みやづ食の日」を実施しているが、その食材の調達に向けては栄養教諭を中心に対応してきた。水産物は地元漁業施設、野菜等は宮津市役所産業振興室と調整しながら、生産者への対応を行ってきた。今後は、生産者との打合せを実施し、さらに地場産物を活用した学校給食の充実を推進したい。



みやづ食の日レシピ集

地場産物を活用した特色ある学校給食の開発

- (1) 地場産物を活用した「みやづ食の日」の学校給食の献立を集め「レシピ集」として各家庭や宮津市内の施設等配布し、地場産物のよさを広く啓発してきた。
- (2) 6年児童が家庭科で「1食分の食事」について学習した内容を基にして「宮津の食材」や「栄養バランス」等を考え献立を作成し、「宮津を食べよう」コンテストを実施して、「宮津らしさ」を表現した献立を1点（優秀賞）選び、2月の「みやづ食の日」の給食に取り入れた。教科学習で学んだことを実際の生活に活かすことで児童の食に関する意識や態度、また栄養に関する知識や地元食材の良さについての理解が深まってきた。



宮津を食べようコンテスト応募作品

地場産物を活用した食に関する指導の充実

- (1) 地域の産物である魚の活用

校区で朝水揚げされた鮮魚を給食に使用している。また、府立海洋高校と連携し、生徒が加工実習した魚の干物や練製品を給食に使用している。それを利用した給食を実施する日に高校生と交流給食を行い、作っている時の様子を聞くことで、児童に感謝の気持ちを育てることをねらいとしている。
- (2) 児童の栽培した野菜を給食献立に活用

地域で採れた野菜はもちろんのこと、体験学習の一環として児童が栽培した野菜を給食で使用している。また、サツマイモを栽培し、やきいも大会を予定している。



海洋高校との交流給食

地場産物を活用した「みやづ食の日」を通して食に関する指導の充実

地場産物の積極的な活用と地場産物に対する児童の理解を深めることをねらいとして、毎月19日を「みやづ食の日」に設定し、市内の小学校給食に宮津産の食材を取り入れた献立を実施してきた。当日は、給食を「食べる」だけでなく、目の前の献立と指導用資料を活用し地場産物の良さを理解する給食指導を実施してきた。当日の献立や指導用資料「みやづ食の日」については、栄養教諭が中心となって作成をしたものである。



みやづ食の日 指導資料

【みやづ食の日の献立（H23 実施分）】

	5月	6月	7月	9月
食材名	スズキ	トマト	トビウオ	竹輪
献立名	スズキのホイル蒸し	トマトの和風サラダ	ザ 宮 スープカレー	宮津竹輪の知恵の輪丼
	10月	11月	12月	1月
食材名	カマス	安寿みかん	府中ねぎ	ヤマノイモ
献立名	カマスのマリネ	安寿みかん寿司	ネギのきつね焼き	かるかん

「食生活実態調査」の実施により状況把握と課題整理

9月に「朝食調べ」を行い実態把握を行った。ほとんどの児童が朝食を食べているが、内容については十分なものではなかった。朝食の指導を全校で一斉に取り組み、半数の学級は授業参観として保護者に公開した。授業後、各家庭に協力依頼し朝食の改善を図った。

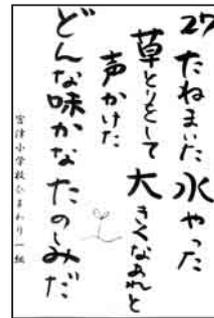


家庭に対する効果的な啓発活動

朝食の取組を始め、各学年の食の指導の取組を学級や学校・給食だよりで保護者に伝えることにより、家庭の「食」に関する意識が高まってきている。また、マナー指導のひとつである箸の持ち方について夏休み前にプリントを配布し、家庭で矯正してもらうことにより正しい持ち方の児童が増えた。

宮津市では、市の食育の取組状況や各学校の取組を「食育だより」で宮津市立小学校のPTA会員に配付し啓発に努めてきた。また、各学校において朝食の取組を始め、食の指導の取組を学級や学校だよりあるいは、給食だよりで保護者に伝えることにより、家庭の「食」に関する意識の更なる高揚に努めている。

また、今年度は学級ごとに「食に関する三行詩・標語」を応募し中から31点を選び、「宮津市食育版ひめくり」を作成し各家庭においても日常的に食育の重要性を考える機会としてきた。



宮津市食育版ひめくり



PTA活動に食に関する指導の協力依頼

PTAの地区懇談会で、共通テーマの1つに「生活リズム」を提案し、睡眠や朝食のあり方を議題に夏休みの過ごし方について懇談を行った。各学年の学級懇談会では、給食や家庭の食事についての交流などを行った。学校からは、食事のマナーについて実態を報告し、あわせて冬休みに取り組む「食のマナー名人表」についても依頼し、家庭への啓発を図った。

保育所・幼稚園への食に関する指導についての啓発活動

PTA事業「親のための応援塾」では、来年度入学予定の保護者10名が参加され、「給食試食」と栄養教諭による「食に関する講話」を実施した。さらに、入学予定保護者とPTA本部役員との交流会を行い、食育についての理解を得るとともに、入学予定の保護者同士の親睦を深めた。

米作り・山の芋作り体験活動

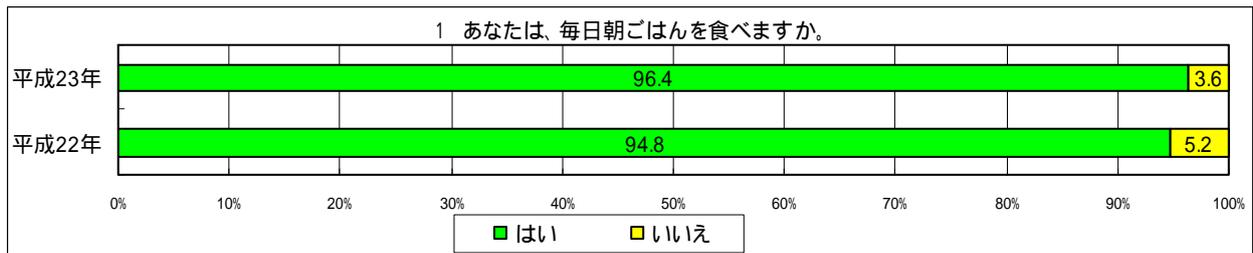
(1) 3年生の社会科での実践

11月の社会科「農家の仕事」の学習として、地域の名産であるヤマノイモ作りを行った。外部講師として地域の農家の方から指導を受け、年間を通して栽培活動を行った。また収穫したヤマノイモは食生活改善委員の方の協力のもと、昔のお菓子作りを行い、収穫の喜びを味わった。

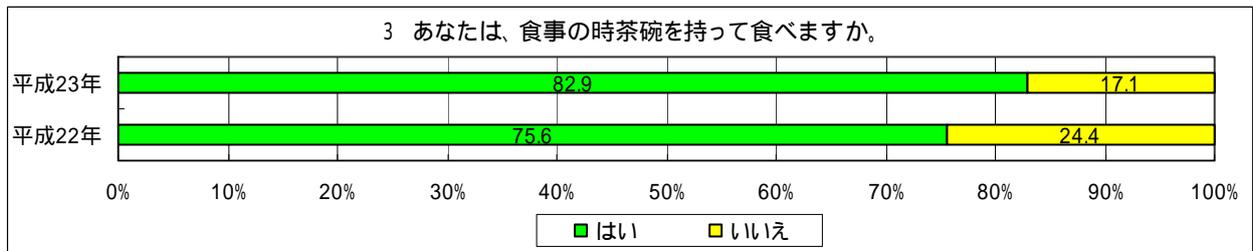
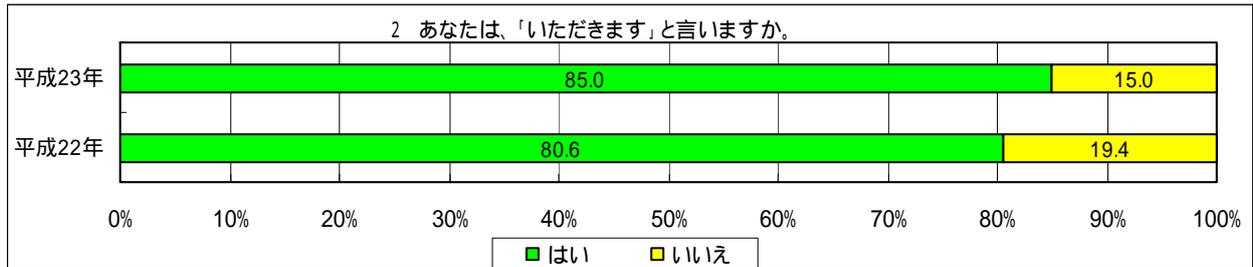
(2) 5年生の社会科・家庭科の実践

10月の社会科「これからの食料生産とわたしたち」、11月の家庭科「ごはんのみそしるを作ってみよう」の一環として、地域の方々の協力のもと、米づくり体験を行った。5月に田植えを体験し、10月に収穫を行った。収穫したお米は、給食として活用するとともに、家庭科での実習に使用した。

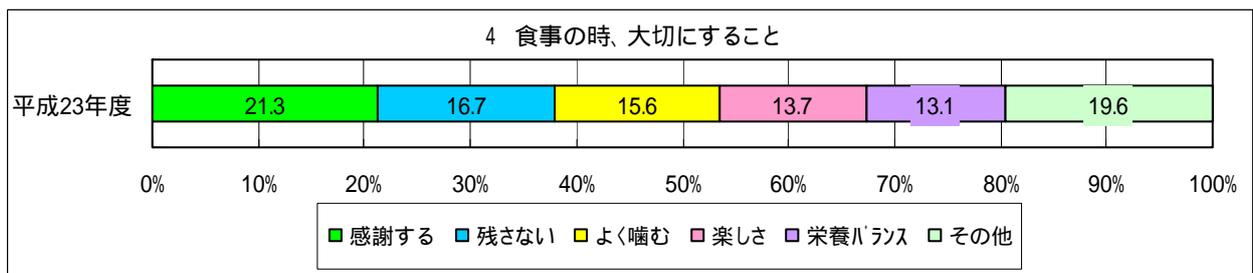
テーマ1～3に共通する具体的計画



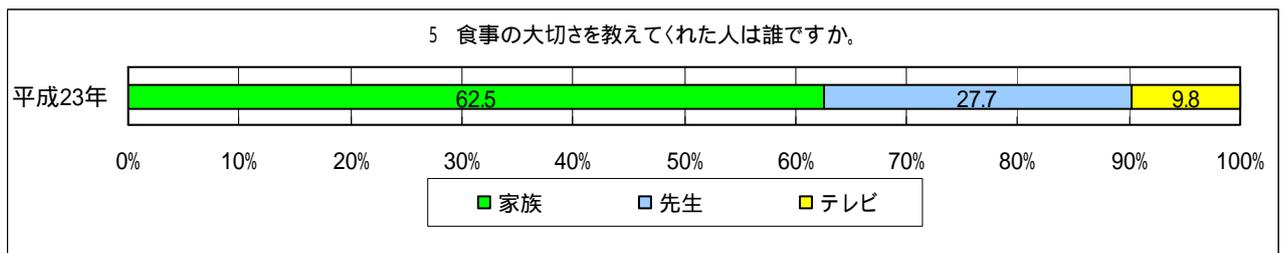
平成23年度は、3.6%の児童が食べていないが、昨年度(5.2%)と比較すると1.6%の改善が見られる。これは、昨年度から各学校において家庭と連携した「朝ごはんの大切さ」の指導や個別支援の取組の成果と考えられる。



食事のマナー等は、昨年度より少し良くなっている。「いただきます」と言うは4.4%の改善であり、「茶碗を持つ」は、7.3%の改善となっている。このことは、これまでの給食でのマナー指導や家庭でのマナーチェック表の活用によって定着してきている。



食事で大切にすることでは「感謝する(21.3%)」、「残さない(16.7%)」、「よく噛む(15.6%)」、「栄養バランス(13.1%)」となっている。これまでの食育指導の取組が活かされていると考える。



「食事は大切」と答えた児童が98%と多く、その大切さを教えてくれた人は「家族」と答えた児童が62.5%もある。やはり、食の指導の基本は家庭にあり、食べることを通して、「感謝の心」や「マナー」等多くのことを学んでいる。

数字で変化のあった事項について

1 給食の残菜量の変化

1日あたりの残菜量（平均）の比較

20年度		21年度		22年度		23年度	
残菜の平均 (1日当り)	残菜0 の日数	残菜の平均 (1日当り)	残菜0 の日数	残菜の平均 (1日当り)	残菜0 の日数	残菜の平均 (1日当り)	残菜0 の日数
895g	12日	620g	26日	229g	72日	36g	140日

2 朝食内容について

22年9月、23年9月調査

(単位：%)

		22年度	23年度
朝食は	食べない	0	0
	時々食べない事がある。	13	7
	毎日食べる	87	93
おかずを食べている	ごはん食	88	94
	パン食	42	53
朝食に野菜を食べる		38	51
パン食の内菓子パンの占める割合		32	25

2 箸の正しい持ち方について

正しい持ち方で色々な物がつかめる児童

(正しい持ち方は出来るが、物をつかむと正しく持てなくなる場合は省く)

(単位：%)

	22年度	23年度
7月	22	44
11月	52	55

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 1 児童の実態、つきたい力について、「食育」の研究を通して、教職員で共通理解できた。
- 2 食の学習を教科の中に組み込むことにより、継続的で広がりのある学習を進めることができた。
- 3 全校で「食育」に取り組むことによって、箸のもち方、朝食の食べ方など、児童・保護者の食に対する意識の向上が見られた。
- 4 実践中心校の研究授業を公開し、他校の食育実践へ波及することができた。
- 5 実践中心校以外の学校においても継続した食育推進が行われている。
- 6 保護者アンケートから「家庭での日常的な指導」の重要性が見られた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 1 教科のねらいと食育のねらいをどう関連させていくか、研究を深める。
- 2 年間指導計画を見直し、地域の特色を考慮した系統立てた指導を進める。
- 3 食の学習を児童自身が生活にどのように生かしているかの変容を目指す研究を進める。
- 4 家庭との連携した取組を粘り強く、丁寧に進めていく。